

翻訳出版が新ビジネスに

世界を目指す日本文学

海外で翻訳され、読まれる日本の小説は純文学。そんな常識は過去のものだ。鈴木光司、江國香織らのエンターテインメント小説が次々に英語になる時代が来た。

三島由紀夫や大江健三郎、村上春樹に吉本ばなな……。海外で翻訳される日本の小説といえは、純文学がほとんどだった。しかし今春、そんな常識が覆った。鈴木光司『リング』、江國香織『さらさらひかる』、北方謙三『棒の哀しみ』、栗本薫『グイン・サーガ 1』の4作が米国で英訳出版された。ホラー、恋愛もの、ハ



編集者時代にはベストセラー『堀田力の「おごるな上司!」』などを手がけた酒井さん。パーティカル社の試みは、海外の新聞にも取り上げられた。装丁は有名デザイナーのチップ・キッドが担当。「中身を気に入り快諾してくれました」



ードボイルド、ファンタジーといったエンターテインメント小説だ。出版したのは、ニューヨークにある「パーティカル社」。日本経済新聞社の書籍編集者だった酒井弘樹さん(41)が4年前に設立した。

大手の出版社にやる気がないのなら、自分が出版文化の中心地から送り出していこうと。単身で渡米。コロンビア大学大学院で比較文学を専攻した日系ギリシャ人が、すべての翻訳を指揮する体制を築いた。『リング』の作者、鈴木光司さん(46)は、同社の翻訳について、

「小説として読ませる流暢な英語」と信頼を寄せる。『リング』は発売2週間で初版1万部を完売し増刷。昨年は、リメイク映画も全米で大ヒットした。なぜ海外で受け入れられるのか。鈴木さんが話す。

「僕の作品はロジカル、わかりやすいんです。日本的怨念をちりばめてはいるけど、ストーリーは論理、論理で展開する。海外で読まれることは常に意識していますよ」

酒井さんは、

「自分が中心地から」

「日本には、質の高いエンターテインメント作品がたくさんあるのに、なぜ海外市場に出ていかないのかと、ずっと疑問だったんです。

先月からは第2弾として、手塚治虫の漫画『ブッダ』など6冊を順次発売。1冊10万部が目標だ。日本でも輸入書として購入できる。

国際交流基金の99年の調査では、外国語に翻訳された日本の書籍は、和訳された書籍の20分の1。日本語を訳せる外国人が圧倒的に不足しているのだと、同基金メディア

事業部の斎木宣隆さんは話す。「とりわけエンターテインメント系は、翻訳者の成り手がいない。文学作品はたいがい、大学にいる日本研究者が訳しますが、古典や純文学でない業績として認められないからです」

パーティカル社の挑戦は、この壁をうち破ろうとするものだ。同種の動きはほかにも広がっている。講談社は今年1月、米国最大手の出版社、ランダムハウス社と提携した。同社の巨大な販売ルートを活用し、エンターテインメント小説の本格輸出に乗り出したのだ。子会社の「講談社インターナショナル」は40年にわたり、海外向けの翻訳本を出してきたが、年に数冊で純文学が中心だった。「文化的な意義を重んじてきたが、今後はビジネスとして成立させた。アメリカは、自分たちの文学が世界一と思っている国で、翻訳本の人気は低い。でも、銃乱射や引きこもりなど、社会的な問題や人々の悩みが世界共通となってきた。今こそ、共感をもって読んでもらえるチャンスだと思います」

講談社の宮田昭宏・文芸局長(59)は、そう話す。

文化庁が昨年度から始めた翻訳事業のリストにも、横森理香ら現代エンターテインメント系作家の小説が含まれている。予算3億円で27作品を出版する予定だ。

ライター 内山美木